

## 入選

### 思いやりの空き地

山口県 華西中学校 1年 柳 颯太郎

ぼくの家の前に空き地があります。そこは何年も雑草が生えっぱなしで、人の背たけまでのびていて、誰も使っていませんでした。

ぼくが小学校4年生で野球を始めたときに、祖父がその空き地を、何ヶ月もかけて、草取りをしたりフェンスをつけたりして、キャッチボールができるようにしてくれました。それからは、近所の子どもたちがその空き地でサッカーや野球をするようになりました。夏になると草がすぐに生えて、そのたびに祖父が草を刈ってくれていました。ある日、いつも使っている子の親が、

「みんなが使っているのに、柳さんのおじいちゃんにだけ草刈りをしてもらうのはおかしい。これからは、この空き地を使う人みんなで草取りをしよう。」

と言ってきて、気づいた人がやるようになりました。

ある日、祖父が草刈りをして、集める時間がなくてそのままにしていたら、いつも遊んでいる子の家の人が、その草を集めてごみに出してくれていました。母に、

「空き地の草刈りをしようと思って行ったら、もう刈ってあったので集めておきました。うちも空き地を使っているのに、いつも草取りしてくれてありがとう。」

と、お礼まで言ってくれたそうです。お互いが助け合い、感謝をしている姿に、心が温かくなりました。

ぼくはほかにも、この空き地を通していろいろなことを学びました。「ゆずり合いの心」もその一つです。ぼくがキャッチボールをしようとその空き地に行ったとき、サッカーをしていた親子がいました。ぼくの姿を見て、「どうぞ」とサッカーをやめてぼくにゆずってくれました。ぼくも同じように、キャッチボールをしていて誰かが来たときにはゆずります。この空き地で遊ぶ人はみんな自然とゆずり合っています。

そのほかにも、祖父の草刈りのしかたで学んだことがあります。それは、「門はき」です。空き地はほかの人の土地と隣接しており、祖父は草刈りをするときに必ず、境界線より30センチくらい外まで草刈りをします。それを見た母が、

「『門はき』だね。」

と行っていました。「門はき」とは、京都の習慣で、家の前のそうじをするときに、隣の敷地の一部の少しそうじをすることだそうです。ぼくは、とてもすばらしい習慣だなと思いました。

この空き地は、ぼくたちにとってはただの遊ぶ場所だけれど、使う人のことを考え、思いやることによって、自然と親切ができていて、とてもすてきな場所なんだな、と思いました。同じように、まわりの人にもこの温かい気持ちを感じてもらえるように、ぼくも自分ができる親切をしようと思います。